
現実的なRPG。

秋月霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実的なRPG。

【Nコード】

N0356BA

【作者名】

秋月霞

【あらすじ】

一般的な高校生の勇橋礫が、自称天使から《RPGシステム》なる物をもらい、それを使って剣を探したりドラゴンぶった切ったり異世界にとばされたり、色々やっていく…話。主人公は度胸が無かったりするけど結果的に最強だったりします。まあ文章力が足りて無いのでそうは感じられませんが…。（練習作だったりします）

1 プロローグです。（前書き）

はじめまして。秋月霞です。

初心者の書いた文章力に欠ける話ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

ていうか誰かが読んで下さるのを祈ります……。

1. プロローグです。

目が覚めた。

眠気を払うように瞼をこすって大きく伸びをして、次に枕元に置いてある眼鏡を…。

「…んあ？」

眼鏡が無かった。

というか枕すらなかった。

今更ながらにここが自分の部屋じゃないと気づいた俺——はやばしれき勇橋礫は、眠いのと眼鏡が無いのとで物凄くぼやける視界で周囲を見回してみた。

とりあえず目に付くものは……あれま、真っ白だ。

壁とか天井とかそういうレベルの白じゃなくて、海に潜って「海が青いなあ」って思うくらいに白しか見えない。あ、この例えは伝わりにくいかな。

……にしてもおかしいなあ、なんでこんな所にいるんだ？普通に生活して、普通に自分の部屋で寝たっていうのに。

とりあえず右手を顎に添えて、考える人のポーズをとって目を瞑って考えてみた。

えーと？寝て目が覚めて周りが真っ白。ついでに何にも無いし自分の部屋な訳が無い。そもそもこの白さは科学的にはば無理だろうな。そう考えると…。

「……………ああ、そか。至極単純にあれか。夢か。」

だよな。ここまで周囲が真っ白ってというのは夢以外じゃあり得ないもんなあ。

…となると、王道というかテンプレというか定石^{セオリー}では、俺が目覚めた時点で何か起こってるのが普通なんだけど……。

なにも起こりそうに無いしなあ、寝ようかな。

実は夢の中で寝るっていうのはさ、夢の中で頬をつねってみるっていうのと同じくらいやってみたかったんだよね。

ひとまず横になろうとずっと閉じていた目を開けて……何か見えたような気がしたが、気にせず再び目を閉じると横になった。布団も毛布も何も無くて寒々しいが、別段寒くも無いので問題ないだろう。さて、長年の夢だった夢の中での睡眠を――

「明らかに気づいているのに寝ないで下さいよ」

さっきまで誰もいなかったところから女性の声が出た。

目を開けたときに見えたのは気のせいじゃなかったらしい。

仕方なく体を起こし、眼鏡が無いので目を細くして（若干睨んで）人影を見ると、明らかにそこら辺にいなそうな格好の女性がいた。見間違いではなければ背中に羽が見えたし頭の上に黄色い輪っかが見えた。

「えーと？どのようなご用件でしょうか」

さっき自分の出した結論なら、ここは夢の中、すなわち自分の脳内な訳であるから……。

「あ、もしかして俺の想像が生み出した幻的なヤツ？うわっ、俺こんなのがタイプなの？初めて知った」

よもや羽が生えている人がタイプだったなんて…。

「いいえ。違いますけど？私は見ての通り天使です。礫さんをお願いがあつて夢の中に来させていただきました」

目の前の自称天使は、優しそうな表情でそう言い放った。

けどなあ、ごく普通の格好をしている天使なんて信用できないね。例えるなら美術館の警備員がジャージみたいなもんだ。

「信じ難い。大体、天使なんて物が存在する訳無いだろ！そう簡単にだまされると思うなよ！」

俺が自称天使に疑いの目（とは言つても眼鏡が無いので先ほどまでと変わらず睨んでいるだけだ）を向けてそう返すと、自称天使は肩を竦めながら答えた。

「そう言われても、仮にでも信じてもらわないと話が進まないんですけど」

「別に話が進まなくてもいいんだけど」

俺はそう返した。

だって何のメリットも無いし。

「そうすると礫さんは永久に目覚めないことになります」

「ちょっと待てーい、横暴だろっ！」

酷くね？だったら俺に選択肢無いじゃん。

「それほど私はお願いを聞いてもらいたいんです」

「はあ…OK。で？何のお願いでしょうか？」

別にピントが合わなくてもいいだろうと思い、ずっと細めていた目から力を抜いた。

ぼやけた視界の中で、自称天使が笑ったのが見えた気がする。

「ありがとうございます。ですがお願いは後回しにして、礫さんに力を付けていただこうと思います」

「え？俺に出来ることだから俺に頼みに来たんじゃないの？」

それだったら俺じゃなくても平気だよね？

「まあ、それもそうなんですけど、礫さんはある一つの能力を持っているので頼みに来たんですが、それ以外はこれっきしなので――

――

ある一つの能力？

「はいちょっと待った。ある一つの能力って何？特技的なものって言ったら本の背表紙を見て値段を当てていうどうでもいいのしかないんだけど……」

ガチで特技はそんなもんしか無いです。

「もちろんそんなものではありません。……えーとそれも追々説明するのでとりあえず最後まで聞いてください」

「はい。すいませんでした」

自称天使の機嫌の傾きを察知した俺は、誠意を表すために正座をした。

「はい。で、力を付けるために今日から筋トレをしても年単位かかってしまうので、素晴らしいシステムを用いて短期間で礫さんに強くなってもらいます」

初っ端から酷いな。相手が頼んできてるのに鍛える言われたよ。

「で？素晴らしいシステムって何？サプリメント？」

「サプリメントなんか使わせるんだったら筋トレさせたほうがまだマシです」

自称天使はやれやれといった様子で俺のボケをいなした。腹立つわあ。

「まあ、習うより慣れろと言いますし、目がさめてから御自分で何とかしてください。ヒントとしては、四角い平面の物を3回叩いてみるといいかもしれません」

突拍子もない自称天使の説明(?)は、とても酷かった。

「具体的に教えろよ！何？何なの素晴らしいシステムって！」

結果的にシステムをくれたって事しか説明されてねえし。

「ま、四角い平面の物、例えばノートとか机とかを3回トントンとすれば分かりますから」

そういつと自称天使は思いっきり礫の首筋に手刀を繰り出した。

「ぐはっ…、そいですか……」

あれ？痛み感じるじゃん夢じゃないじゃん、とか考えながら俺は
気絶した。

2・朝ですよ。

目が覚めた。

目を開けると、見覚えのあるアニメのポスターが（裸眼なのでくつきりとは見えないが）見える…気がする。

ふう…よかった。自分の部屋だ。

結果的にあれ、夢じゃないっぽいしね。記憶も確かすぎるし何より…。

「首痛えし…」

左手で首筋を押さえながら思わず呟いた。
物凄く痛い。　　ありや絶対夢じゃないね。

「さーてと、起きるかねえ…」

部屋には一人しかいないのにそう宣言してから（独り言が癖なんだよ！）、体を勢いよく起こして体を伸ばす。でもって枕元に置いてある（今度はちゃんとあった）眼鏡を取り、軽く眼鏡拭きで拭いてからかけた。

あー、世界がくつきり見える。

続いてこれまた大事な物。

猫のストラップが無理やり付けられた懐中時計を首から提げた。

今日は五月九日、ごく普通に高校の登校日だ。

さて、今更ながらに自己紹介をしよう。

名前は知つての通り勇橋礫、髪形は普通より若干長く肩にかかるかな？って位の普通の黒髪、前髪長し。でもって黒縁の眼鏡。背は若干高くて175ちよいで体重は48。体重の軽さには評判がある。

んな体系やら髪形やらで、私服でいると女子に間違えられることがある。それが悩み。

運動神経は中の下もしくは下の上、五段階評価的には1か2。それくらい運動は苦手だ。でもって頭のほうは若干自信はあるが、それでも中の上から上の中だ。

特技は前に述べたように本当にこれといった事は出来ない。体が柔らかいわけでもなければ何か習い事をしているというわけでもない。一応料理はできるが嗜み程度だ。

そんな何の特徴もない俺は中学時代まで過ごしていた田舎を出て親戚というか父の妹が大家をやっているアパートに住ませてもらっている。まあ、簡単に言えば両親が他界したからだ。

ちなみに、高校生の俺が一人暮らしが出来るのは叔母さんがアパートを経営していたという偶然と、叔母さんがいい人だったという偶然が重なって、出世払いという結果が生まれたおかげ。

生活費は両親の貯金やら何やらを切り崩しながら何とかやっているし、高校も引越してきたので渋々私立に入ったがその分のお金もきつちりある。

バイトをする気は今のところは全くをもってありやしない。

敷いていた布団を押入れに片付けてから、制服に着替える。

でもって脱いだ服は部屋の隅にたたんで置いておいて、日曜にまとめてコインランドリーだ。

次に朝ごはんとは弁当を作る。

まあ、朝ごはんはごはん味噌汁卵焼きの三つだけで、弁当のおかずもほぼ昨晚の残り。あまり美味しそうとは言えない。

高校生の一人暮らしだし、仕方ないよな、うん。

フライパンで厚焼き玉子を作りながら一人で頷いていると、滅多にならないインターホンが久々に鳴った。

なんとまあ珍しい。

「え？あ、はい少々お待ちをー」

慌ててガスを止めてから、鍵を開けてドアを開けると、俺の叔母さん（40後半）が居た。

「あれ？叔母さん。おはようござー」

「叔母さんはやめろと言ってるでしょうが！」

時刻は6時11分、『おばさん』という言葉に年齢を感じずにはいられない叔母さんから、腹に膝蹴りを喰らいました……。

「相変わらず花がない食卓だねえ、全く」

余計なお世話だったの。とか思いつけど、腹がまだ痛むので口に出さないでおこう。

「で、朝から何の用ですか？7時には家を出たいんですけど」

晩御飯用に多く作っておいたご飯と味噌汁、それから卵をも一つプラスして作った厚焼き玉子を出して、叔母さん…もとい梅さんと朝ごはんを食べていた。

「いやねえ、昨日の夜礫が出かけたから何の用事だったのかなあと」
ほう…やはりか。ありや夢じゃなかった訳だ。あの似非天使め。

「ああ、単に寝付けなかったんで散歩してただけですよ。迷惑かけてすいません」

卵を口に運びながら噓をつく。

あ、今日の厚焼き玉子はちと醤油が多かったかな？

「なんだ、そんなことか。寝付けないなんて今日なんかあるのかい？」

梅さんが皿の上に残っていた厚焼き玉子をまとめて持っていった。
くそう…。

「いえいえ全く。昼寝しすぎただけですよ」

これは嘘じゃないよー、昨日はガチで昼寝しました。雨降ってたし。

残っていた厚焼き卵を梅さんに持っていかれたので、軽く梅さんを睨みながら口にご飯を含んで味噌汁を飲む。

「ふうん……ほいご馳走様」

梅さんが食器を流し台に持っていく。

俺は味噌汁だけでご飯を腹の中へ片付けると、同じく食器を流し台へ持っていった。

「あ、食器くらい洗うんで大丈夫ですよ。それより自分の部屋に戻ってくださいよ」

洗おうとしていた梅さんを止めて扉のほうへ追いやる。

「はいはい。じゃあね」

意外や意外、梅さんがあっさりと出て行ってくれたので、俺は食器をさっさと洗ってしまおうと腕をまくった。

が、叔母さんは扉をちょこつと開けて

「あ、そうそうあの厚焼き玉子、醤油がちよつと多すぎて若干辛かったよー」

文句を残して行った。

「全部食べておいて文句言うとは何事だっ!」

俺は人の料理にケチをつける梅さんを怒鳴ったが、隣の部屋からうるさいと怒鳴られた。

畜生……。

「すいませーん」

一応謝つとくけどさ、仕方ないんだよ。

朝っぱらから人にご飯を作ってあげたっていうのに、文句を言われたんだよ？ イメージとしては、道に迷った人に地図をプレゼントしたら「この地図汚いです」とかいわれた感じだよ？ 全く。

2・朝ですよ。（後書き）

あと数話で本題に入ります。（たぶん…。）

3・登校時間です。

「よし、誰もいない」

いつも通り始業より大分早く学校に来た俺は、誰もいないことを確認してそう言った。

毎日こうして早く来て、誰かが話す声を聞きながら寝るのが日課だ。

……別に悲しい奴とかそういうわけじゃないから。友達いるから。ちゃんと。ただ携帯を持っていないっていう残念な理由があつて、友達とかと連絡が取れないだけだから…。

まあ、そんなことはどうでもいいんだよ。

「あの自称天使ならぬ似非天使が言つてた、『素晴らしいシステムとやらを解明しなくては…』」

俺はとりあえず鞆を机の脇にかけ、席に着く。

えーと……、ヒントは『四角い平面の物を3回叩いてみる』だったか。

四角い平面の物……机とか？まあ、例えば机って言つてたしな。そう考えて、机に左手で頬杖をついたまま右手の人差し指で机をトントンとした。

「うわっ」

三回目のトンで机の表面が青白く光り、何かの画面が表示された。

「……RPG System?」

画面の真ん中にはそう書いてある。

そして右上にはパソコンでよく見られる×、下にはパソコンのタブのようなものが七つあり、左から『ステータス』『スキル』『アイテム』『クエスト』『フレンド』『称号』『ヘルプ』とある。

しかし、クエストとフレンドと称号というタブはグレーになっていて、現代人の俺には使えないタブだと十分に分かる。

試しにステータスというタブを押してみる。

『名前：勇橋 礒 《ハヤバシ レキ》』

職業：学生 称号：設定無し

状態：取得経験値

量増加：システム適応中』

なんだ？状態システム適応中って。

まあいいかと次にスキルを押してみると、『・戦闘スキル群・生活スキル群・学業スキル群』と三つの項目が出た。

きつと分類しないといけないほど物凄い量のスキルがあるんだろ
うなあ。

「なるほど」

ざつと見てRPGに若干重要だと思われるレベルの表示がないので、オンラインにたまーにある完全スキル制のロールプレイングだろう。

「あ？てか学業スキル群って…」

俺はもしかやと思い学業スキル群を開けてみる。

『国語科スキル 1 数学科スキル 1 英語科スキル 1……』

案の定全てスキル化されていて、しかもスキルレベルが全て1……。

義務教育九年間の努力が……あ、でも俺頭の中で計算できるぞ？
うーん……もしや、今の値を1とした場合の数値なのだろうか。だとしたら大分偏りとかが見られると思うんだけど……。

そう思っていると、なんだかイヤホンを付けているかのような近距離から、自転車の鈴の音のような音がした。

「ん？何？」

あわてて耳元を探るが何も無い。つてそりゃそうだ、音楽プレーヤーなんて買う金あったら別のもんに使うつての。
不思議に思いながらも手元に目線を戻すと、スキル値が変わっていた。

『国語科スキル 5 4 数学科スキル 6 8 英語科スキル 4 3……』

あり？めっさ上がつとる。なんで？

しかも俺が苦手な英語だけ丁度数値低いし、若干得意な数学高いし。

軽く考えて、さっきまではオール1だった数値が、俺の能力に適応したってことかな？

面白そうなので戦闘スキル群も見てみるが……ほぼ均一で1。運良く刀剣スキルのみ13だったが、それは中高の体育の選択科目に行われた剣道のおかげだろう。

「あ、さっきのシステム適応中ってやつか」

便利だなあ……。

「でもこつから鍛えろって言ってたもんなあ…面倒だなあ……」

机に浮かび上がっている画面を見ながら嘆いた。あの似非天使め…。

大体、スキルが多すぎて何を鍛えりゃいいか分からんし、《魔法スキル・火系統》とかってどうやって鍛えるんだよ。ライターでもカチカチしてりゃあいいのか？

「ていう俺も鍛えようとしてるってのは、不思議なんだけどなあ…」

眼鏡を中指で押し上げながらそう呟いていると、ガラガラ…と扉が開いた。

しくじった。時計見てなかった！

「あれ？勇橋、今日は起きてる」

入ってきたのは、いつも同じ時間に登校してくる律儀な友人、朝あさ森命だ。髪形はまさしく野球少年というべき坊主（偏見）だが、野球部ではなく茶道部なよく分からん奴。

「……お、おはよう」

そう言いながら、俺はポケットから懐中時計をだして時間を確認する。

……うん、やっぱり七時四十分だ。

「おっはよう！珍しいな、起きてるなんて」

朝森はそう言いながら自分の机の上に鞆を置くと、こちらに近寄ってきた。目線は俺の懐中時計に釘付けだ。いや、懐中時計についている猫のストラップだろう。

「昨晚寝すぎたから寝れないんだよ」

俺は肩を竦めてみせて、懐中時計を胸ポケットにしまおうとしたのだが、

「あーちよつと待った、それ見せて」

案の定そう言われたので、仕方なく首から懐中時計を外して朝森に渡した。

「え？まあいいけど…」

「あんがと」

朝森はストラップをじつくりと眺めたり懐中時計の装飾を見たりしている。

そこでふと気づいた。

机に表示されている画面には気づいていないのか？

「こんな可愛げがある手作りみたいな物をつけてるとは、彼女持ちだったのか!？」

ああ、気づいてないな。

という事は、見えてないんだな。よしOKご都合主義。

「彼女なんていねえよ。それは故郷の幼馴染からもらった物」

「なるほど。あんがと、結構綺麗な懐中時計だな」
「そりゃどうも」

そりゃ綺麗だろうよ、父さん自作の特注品だし。
朝森から返してもらった懐中時計を首から提げ、時計を胸ポケットにしまってから俺はさりげなく机の右上をトイツと触り、画面を閉じた。

我ながらなんとさりげない。

「というか、朝森が懐中時計に興味を示すつても、シニールだな」
俺は懐中時計を眺めていた朝森を見て、思った事を率直に述べてみた。

「何を言う！こう見えて小物とか好きなんだぜ？俺」
「えーキモっ…とか思っけど口に出さないでおこう…」

危ない危ない。本音が出るところだった…。

「思いつきり言ってるよ。……そういや、そろそろ部活とかの大会
近いみたいだけど、勇橋は部活には入ってないのか？」

ああ、そんな季節かあ…。

「いや？俺はどこにも入って無いよ。インテリ派だから運動は苦手
だし、特にこれといって惹きつけられる文化部も無かったしね」

そう言つと、朝森は意外そうな表情をした。

「へえ、部活入って無いのか。この高校、部活が物凄い多いから皆

何だかんだ言って部活に入ってるんだよな。たぶん部活に入っていないなんてのは勇橋くらいだと思うぜ？」

「そんなにか？高校生なんだから、バイト優先する奴もいると思うんだけど」

「まあ、そうなんだけどな？うちの学校、部活数が物凄くて一種のリンゲルマン効果で一つ一つの部活の活動量がすくないから、バイトやってる人でも普通に入れるんだよ」

は？リンゲルマン効果？

「おい、馬鹿がなれない難しい単語使うと、逆に馬鹿に見られるぞ」
「馬鹿言うな！ちなみに俺はたった五人しかない茶道部員なんだ」

いや知ってるよ。

とか思ったが、さすがに良心が痛むのでスルー。

「茶道か…ふあああ…あ……茶道ってやはり和服？」

やっぱり眠いので欠伸。

「もちろん。茶菓子も出るし本格的だぜ？」

「そうか……、やっぱり眠いからねるわ」

「あ、やっぱり寝るのか。おやすー」

「おやすみー」

スキル解明は家に帰ってからで良いか。

3・登校時間です。（後書き）

学校での無意味会話も入ってグダグダだけど頑張ります。

4・色々説明します。(上)

「という訳で、ヘルプを使ってみよう!」

とりあえず今日の学業を済ませ、バイトも部活も無い俺は友人達の会話をさりげなく振り切って、全力で帰ってきた。

でああ、全力でチャリを漕いだおかげでテンションが若干上がった故の宣言だった……。

「おい!うるさいぞ!」

お隣さんから苦情を頂いた。

「すいません!」

「ふう……」

制服を脱いで愛用の真っ黒ジャージを着込んでいるうちに、段々とテンションが下がってきた。

よし。それじゃあ、画面を何処に開こうかなあ……、普通に机でいいか。

俺は机をトントントン、と触り画面を展開させて真っ先にヘルプを押した。

「大体、魔法系統のスキルをどう上げろってんだよ……」

何だかんだ言ってやっぱり気になったので、授業中やら休み時間の間にノートや眼鏡のレンズなどに画面を展開させて、ずっとスキル欄に目を通していたのだが、やはり気になったのが、『戦闘スキル群』だった。

そもそもあの似非天使に「力を付けろ」と言われていたのが、この『戦闘スキル群』を上げれば良いのだろうとは思っていたのだが、先ほど挙げた『魔法系統』のスキル達や、『幻術スキル』などの明らか誰かに最初の一步を教えてもらわないと鍛えられないようなスキルをあげたい場合、どのように上げればいいのか全くをもって分からなかった。

ちなみに、昼休みに友人の朝森と軽いどつき合いをしていたら、また例の鈴の音がして、『格闘スキル』が二になっていた。

そういう所から考えて、きっとそれっぽい事をしていれば、スキルは上がるんだろうと思う。

なのでヘルプ画面でその辺の項目を搜そうとしたのだが……。

『ヘルプ 質問事項を打ち込んで下さい。』

「なんとという簡略化！」

下半分がキーボードになっているので、きっとメインシステムがなんか繋がついて、そっちでここに打ち込んだ質問の答えを打ち込むという、ちょっとしたメールみたいなシステムだろう。

相手はもしかああの似非天使なのだろうか。

「まあ、いいや。じゃあ……最初は『魔法系統スキル』のレベルの上げ方でいいか……」

キーボードに触るなんて、故郷を出た時以来だ。

そんな訳で若干懐かしみながらキーボードを叩き、エンターキーを押す。

すると、画面に打ち込んだ文字が消え、『回答中……回答中……』と表示された。

「あ、やっぱり向こうで答えてるんだ」

なんかサポートセンターとかあったら面白いな。あ、でもこのシステムってあの似非天使とかの自主開発？それともどっかの会社開発……な訳無いよな。

あ、答えが返ってきた。

『魔法系統のスキルは、今のところ使えません。いずれ、使える所に行ったときに鍛えてもらうので、今のところは上げられる物を上げておいて下さい』

使える所に行ったときって、どう考えても地球じゃ使えないぜ？でもまあ、使えないならいいか。とりあえずそれらは放置しておいて。

『というか、このスキルとやらを使って何をするんでしょうか？目的によって、鍛えるスキルが変わってくると思うんですが』

まあ、どう考えてもこの平和な国日本では使わないような物ばかりなんだよな。

それにさっきの使える所に行ったとき。っていう言葉的にも、考えられる事はある。

たぶん。異世界。

『確かにそうでした。最初に説明しておけばよかったですね、すいません。今日の深夜24時にまた会いに行きますので、待っていてください。』

「結果的に二度手間じゃねえかよ!!」

今日一日の時間を返せよ!

とかまあ、色々思うがそれは置いていて。

「一から十から百から千まで、聞かせてもらおうじゃないの」

俺は何だかそのまま待つのも癪なので、少々危ないが台所の包丁を22時まで素振りして(こんなので剣とか刀を使うのが上手くなるってのはしつくりこない)『刀剣スキル』が35になったのを確認し、寝た。

はっ、しまった。寝過ごした。

俺は慌てて飛び起きて、辺りを見渡した。
するとやはり、あたりは真っ白だった。

残念な事に、また眼鏡が無かった。

「使えねえな似非天使の野郎……」

「え?えせてんしって私の事ですか?」

「!?!」

思わず口に出してしまっただのにも驚いたが、その言葉に返事があったのにも驚いた。

「ははは、あだ名みたいなものですよ。ハハハ…」

我ながら乾いた笑いだと思った。

……じゃなくてだな。

「とりあえず、似非天使殿。一から十から百から千まで教えてもらいますよ?」

俺はそう言いながら、作っておいた質問用紙をポケットから取り出した。

フッフッフ……何を聞きたいか分からなくなりそうなので作っておいたのさ。

「分かりました。とりあえず、何から聞きたいですか?」

「んじゃあ、面倒だからこれに書いてあるヤツを説明していつて」

質問用紙に書いてある質問は全部で五つ。

一つ目、『何を頼みたいのか』

二つ目、『何故俺なのか』

三つ目、『それを頼む似非天使は何者なのか』

四つ目、『ここは何処なのか』

五つ目、『RPG systemは誰が作り、どういう仕組みなのか』

一番聞きたいのは一つ目だ。

「なるほど。分かりやすくまとめて来ましたね。まあ、予測していたので私も答えを用意してますから、楽なんですけどね」
「まあ、じっくりとお願いします」

という訳で、似非天使の講義スタートだ。

「ではまず、礫さんに頼みたい事は――」

似非天使は何も無いところから、薄いノートを8冊取り出した。
……いやいや、手品ですか。そうですか。

「この『異世界旅行記』に封じられていた物、剣やら鎧やら宝石やらを回収してきてもらいたいんです」

そう言って似非天使は一冊のノート（表紙には『異世界旅行記1』とペンで書かれている）を掲げ中をぺらぺらとめくって見せた。

所々のページに見開きで地図のようなものが書かれていたり、1ページ使って絵が書いてあるのが見えたが、それ以外はほとんどが文字だった。

「この異世界旅行記はその名の通り、私の主が異世界を渡り歩き、その世界の事を書き記したノートで、要は日記帳みたいなものです。それで、この全8冊の旅行記で丁度24個もの世界について書かれていて、主はその24の世界の物を異世界の魔法やらなんやらを使って、記念品としてこの本に封じていました。とりあえずここまではいいですか？」

えーっと。

物凄いファンタジーだね、うん。

まあ、ひとまず仮定としてその話を信じるとして。

「1つだけ。その、似非天使の主って人はどうやって異世界を渡ったって言うのさ？」

そこが重要だ。ノートに物を封じ込めるのを異世界の魔法を使っ
て。っていうのは理解できる。でも、世界を渡るっていうのはいま
ひとつ理解できない。

ていうか、なんで主^{あるじ}？あなた召使ですか。

「私の主は、個人的な能力として『世界渡り』を持っていたので、
その力を使って世界を渡っていました」

でたよ異能。若干厨二病入ってね？

「それですね。主は24の世界を渡り、いろいろな事をして精神的にも肉体的にも疲れたので、世界渡りをやめて、この私に異世界旅行記を管理させてから、この世界で長い生涯を終えました。それで、ここからが本題なんです。主が異世界旅行記を私に託して暫くたってから、この異世界旅行記に物を封じていた術式の力が衰え始めて、今から1年ほど前について封印がとけてしまいました」

なるほど。信じ難いファンタジーな話だなー。

にしても1年前か……やけに前だな。

「どうして、1年経ってから俺に頼みに来たんだ？」

「最初の8ヶ月程の間は、私1人で何とかしようと頑張っていたんですが、あまりに厳しいと分かったので、それから昨日になるまで、私の主と同じような何か能力を持った人を探していて、ようやく見つけたので昨日、頼んだんです」

ふーん。

「OK、じゃあさっきの話の続きをお願いします」

「はい。それですね。封印がとけてしまう時まで、ただその場に出てきてしまうだけだと考えていたので、何も対策を取っていません。かっただけですが、封印されている間に力が蓄えられていたのか何なのか、封印がとけると同時に全ての物やら生き物が思い思いに吹っ飛んでしまったんです」

「それで、俺に探し物を手伝って欲しいと」

「そういうことです」

完全にパシリじゃんそれ。手伝う義理無いよね。

4・色々説明します。(上)(後書き)

ぐだぐだですが、あと2、3話で本題入ります。きっと。

5・色々説明します。(下)

「それって、俺が手伝う義理っていうか……俺が手伝わないといけない理由ってあるの？一応、この間了承してるからやるにはやるけど」

さすがに俺も一度了承した事を破棄するほど人間捨てちゃあいないよ。

けど、理由も無しに能力持つてるからって（未だに自分が能力を持つているとは思わないが）他人のミスの尻拭いというか、赤の他人の事件の後始末を手伝いたくは無いね。

「理由……ですか……」

これは意外な質問だったのか、さっきまで饒舌だった似非天使が言葉を濁らせて、俺が昨日とったような『考える人のポーズ』（右手で左手の肘を掴み、左手は顎にセットするポーズ）をとって考えている。

そつえば上野の考える人の像って、大分溶けて左手をくわえてる様にしか見えないよね。ってそんな事はどうでもいいんだが。

俺が頭の中で脱線していると、天使がポーズを解いた。

「考えられる理由としては、礫さんが住んでいる辺りにもいくつか『物』があるようなので、それが発見されると礫さんの日常が壊れたり、酷い場合だとその『物』がドラゴンったりするので、礫さん自身にも被害があります。なので、それを阻止できる力を礫さんは持っているのです、それを阻止できるならした方がいいかと……ど、

「どうでしょうか。ご理解いただけましたか？」

「なる。そうか。異世界の物って言ったたら、大抵危険な物とかだろっし言い方的にもそういう物なんだろうから、回収を手伝えるなら手伝ったほうがいいのか……。」

「OK、理解した。とりあえず協力する」

「俺は意外と優しいのさ（笑）」

「ありがとうございます。じゃあ次ですね。えーっと2つ目の質問ですが、礫さんに頼んだのは礫さんが主と同じ能力者だからです。ついでに3つ目の質問にも答えますが、私は主に作られた精霊のような物なので、魔法やらなんやら色々使えます。その力の一つで『能力者』を捜す力もあつたのでそれを使って礫さんを見つけて、礫さんに頼んだという訳です」

「へえー、納得納得。似非天使はやっぱ天使じゃなかったか。でもやっぱり少し納得いかない。」

「だから、俺能力なんて一度も使った事無いっての」

「そういう厨二めいた物なんて持ってないって。持ってたなら今頃ラノベ的展開で、少女助けたり悪の組織ぶっ潰したりしてるって。」

「あ、でも今のこの状況もラノベ的展開か……。」

「礫さんは能力持ってますよ？この私が保証します」

「ほぼ初対面の人に保障されてもしようがないんだけど……。」

「でもさ、使えないなら意味無いじゃん」

飛べない豚がただの豚なら、力が使えない能力者なんてただの人だ！

「大丈夫です。そこらへんも《RPG system》で解決しますから」

「ふーん。まあ、そこら辺の事はあとで聞くから残りの質問お願いします」

「了解です」

ここまできてようやく似非天使が座った。

「さて、4つ目ですが。ここはもうご存知かと思いますが、夢の中じゃありません」

そりゃそうだ。

「ただ、現実存在する所でもなくて、ここはとある山奥の廃村の地下にあつた主の基地的な所に、嚴重に秘匿やらなんやらの魔法をかけた場所です。まあ、対異世界旅行記用の秘密基地だとも思つて下さい。今は私が礫さんが寝てる時に転移魔法を使つて連れてきていますが、礫さんにも転移魔法が使えるようになるでしょうから、じきに自分でも来れるようになりますよ」

へえー！！

秘密基地か、すごいね。

「あ、でも秘匿やら何やらの魔法がかかってたなら、旅行記から飛び出していった奴らも壁に当たつて外に出られなかったはずじゃない

いんですか？」

ヘイ矛盾！

「残念ながら内側からの被害は考えてませんでした。旅行記から飛び出していった物たちは一箇所に穴を開けて、まとめて出て行きました……。でももう穴は塞いで、内側からも魔法やら何やらをしてありますから、万全です」

あれ？というかまとめて吹っ飛んでいったんなら、海外とかにも飛んで行った！？

「な、なあ。あと物があるのって俺の住んでる辺りと……どこら辺ですか？」

「あ、海外とか、この基地から遠いところから回収したんで、礫さんが住んでる辺りに3〜4個と、あとこれは後でいうつもりだったんですが……その、この異世界旅行記の内側にも飛んで行ってしまつて……」

「内側？」

ノートの内側に飛んで行ったら、ノート爆発しね？

「要は、旅行記の別の世界……とは言っても1巻から8巻のそれぞれの巻に存在する世界の、一番広い世界に入っただけ……」
「つまり、俺は8つの世界に行って回収してこないといけないと」
「そういうことです」

うつわ。面倒！ てか『物』達、頭いいなオイ。

「でも俺、似非天使の主みたいな異世界渡りの能力を持ってる訳じ

やないだろ？」

いや自分の能力分からんけどさ、皆が皆同じ能力ってことは無いだろ。

「そこらへんも大丈夫です。ちゃんと主が異世界渡りの魔法も研究してそれぞれの世界のページの地図に、その魔法がかかってますから」

なるほど、スーパーマ。オ64のステージの入り口みたいな絵に飛び込んだら異世界なんですね。

「ああ、大丈夫なんだ。…でもさ？それ聞いて思ったんだけどさ？」
「はい？」

「絶対その魔法のせいで、『物』がその世界入って行ったよね」

その魔法さえ無ければ、その『物』たちは異世界なんか飛べなかったはずだろ。

そう思っ指摘したら、似非天使の表情が凍りついた。

「そ…そ、そうですね……。はあ……」

あからさまに落ち込んでいるが、まだ聞きたい事はあるので慰める事にする。

「ま、まあ、誰だって失敗はあるさ。似非天使の主はそれが大きかっただけだろ？気にすんなって」

「はあ…そうでしょうか……」

「とりあえず、終わった事はしょうがないし、最後の質問お願いします」

これ以上慰めるのも面倒だし。

「はい……。えーつと《RPG System》は主が研究していた魔法やら何やらの知識を私が継ぎ、開発した人生チートシステムみたいなものです。仕組みは色々な魔法を組み合わせで、ついでに化学も融合させてるので、作った私にもよく分かりません」

おい。どーゆーこっちゃそりゃ。

「とまあ、質問に対する答えは以上ですが、これ以上質問はありますか？」

うーん…………。

「じゃあ、質問というかこの《RPG System》に対するクレームというか、ダメ出しというか改善して欲しい所なんだけど、改良できる？」

「あ、はい。できますよ」

よし。じゃあこの《RPG System》を俺好みに改良するかね。

5・色々説明します。(下)(後書き)

とりあえず、説明終了。

ようやく次回から本題入ります。

ここまで読んでくれた皆さん。見捨てないで下さい！

6 ゲーム開始だね。(前書き)

ようやく本題入ります！

6・ゲーム開始だね。

はあ……。疲れた。
全然寝てないし。

とりあえず大きく伸びをして、眼鏡をかけてから懐中時計を付ける。

昨日、あれから色々とりふれシステムを改良していたら、気が付けば朝5時になっていて、慌てて似非天使に気絶させられ（もう事情知ってるから気絶させなくてよくね？）今に至る。

なんだが、布団を畳んだら料理するのも面倒になったので、俺は制服に着替えながら通学靴に入っている財布の中身を確認し、「今日は昼飯をコンビニのおにぎりですませるだけで良いか」と言い訳をして、机の上に画面を広げる事にした。

《RPG system Ver.2》

改良の末、《RPG system》は名称を《RPG system Ver.2》に変え、色々な機能が変わった。

まず、ステータス画面の情報量が少なすぎるのでスキル画面と合併。名称はステータスで上半分に

『名前：勇橋 礫 《ハヤバシ レキ》

職業：学生

称号：設定無し

状態：取得経験値

量増加』

と表示され、した半分にスキル画面が表示されるようになった。
（実際はステータス1に対しスキル2の比率で表示される。）

またスキルに関しても改良した。

まず、あんなにたくさんスキルがあつたら、今何が鍛えられたのかよく分からなくなるので、使うのにも鍛えるのにも最大8個まで入るスキルスロットに入れなないといけないようにした。これは、昔MMORPGをやったときの記憶を元に施した改良だ。

そして、さすがにこれは無いだろうということで、『学業スキル群』を丸々削除した。

改良した点はこれだけだが、似非天使から《RPG System》に関して色々説明を聞いた。

『アイテム』画面は、異世界に存在する『空間魔法』というのを組み込んだシステムで、MMORPGのようにどんなものでも収納できる。いわばド。えもんのアレだ。

『クエスト』画面は、似非天使が探知した『物』の場所・数・形状などがこれまたMMORPGのクエストのように送られてくる画面だ。

『称号』画面は、その名の通り称号を管理する画面で、称号というのは厨二病の二つ名みたいな物の事で、なんか偉業を成し遂げたりすると《RPG System》がそれを称号として、ステータスに反映するらしい。なんでも、俺の能力とやらもこの画面で管理できるらしい。

そして『フレンド』画面。これが一番使用頻度が少ないんじゃないかと考えている画面で、今後俺以外にも能力者がいて、似非天使が協力を要請して《RPG System》を渡した場合に、この画面で交信ができるらしい。

いや、世界搜してようやく俺を見つけたんなら、そう簡単に能力

者なんて居ないだろと思ったが、なんでも近くにいらしい。今度コンタクトを取ってくるようだ。

そんな訳で《RPG System Ver. 2》のタブ7つが6つ、『ステータス』『アイテム』『クエスト』『フレンド』『称号』『ヘルプ』になり、その内『フレンド』を除く5つが使えるようになった。

「という訳だが、スキルスロット。何を選択しようか」

昨日改良してる時に、ついなので機能が被っているスキルをまとめたり、レベルの上げ方を調べたのだが、やはり選ぶとなると悩む。

戦闘時の立ち回りや身体能力は、使用中の『武器スキル系』のレベルによって左右するという。

ちなみに『戦闘スキル群』内のスキルはざっと20以上はあった。

「まあ『刀剣スキル』『格闘スキル』『軽業スキル』に『生活スキル群』の『乗用機操縦スキル』は決めたんだよ。決めたんだけど、あと4つ…」

『刀剣スキル』『格闘スキル』は言うまでもない。

『軽業スキル』はあれだ。綱渡りとか空中3回転とかサーカスみたいな動きができるアレだ。戦闘中にあれできたら便利だろうなっと感じて入りたい。でもって『乗用機操縦スキル』はなんと便利な事か。自転車から飛行機まで、このスキル1つで乗り物全てを操縦できるらしい。

それで、問題のあと4つだが魔法を入れるかどうかを悩んでいる。

似非天使によれば、『魔法スキル系』は一度魔法が存在する世界に行つて、魔力を感じてみないと使えないらしい。

なのでスロットに入れていても鍛えられる事は無い。

「なら異世界に行くまで、色々な『武器スキル系』を試してみるかなあ」

結果的に『刀剣スキル』『格闘スキル』『槍・棒スキル』『斧・鎌スキル』『弓・銃スキル』『ナイフスキル』『軽業スキル』『乗用機操縦スキル』の8つに決まつた。

そして時刻は8時25分

俺は走っていた。

「はあ…はあ…しま、った…今日、学校だった…！」

スキルを決めて、スキル値を上げるための小道具（割り箸鉄砲とかペーパーナイフとか）を搜したり作ったりでのほほんとしていて、気が付けば時刻は8時。

焦って全力で自転車をこいだせいか、『乗用機操縦スキル』のレベルが上がったらしい。今何かは知らないが。

まあ、とにかく間に合つてよかった。

そう思いながら教室に入り、「あ、今日は休みかと思つたぜ」とか言ってくる朝森に「久々に寝坊しちゃつてさ」と返し、自分の席

に崩れ落ちた。

「はぁ…遅刻するかと思った……」

皆勤賞狙ってるのに。危ない危ない。

さて。

今週はスキルを上げまくって、クエスト開始に備えよう。

そう考えながら、眼鏡のレンズに画面を展開し、クエスト画面を開く

『クエスト』

・『妖刀を取りに行け』

・『宝玉の奪取』

・『オリハルコンの探索』

・『ドラゴンの捕獲もしくは消去』

以上全4件』

ドラゴンの捕獲もしくは、消去？討伐じゃなくて？

ああ、この世界に居ちゃいけないからか。

「じゃあ頑張るかなー！」

俺は机に伏せながら小声で気合を入れた。

7・クエスト開始します。

『受注クエスト』

《妖刀を取りに行け》 クリア条件・妖刀『パンドラ』の回収。
クリア報酬…回収した妖刀

妖刀の所在地…柳葉市地下水道のどこか』

『受注クエスト』

《ドラゴンの捕獲もしくは消去》 クリア条件・緑地竜の捕獲、
もしくは痕跡の消去。

クリア報酬…日本円5000。

緑地竜の所在地…柳葉市地下水道のどこか』

とまあ、クエストを受けてみた訳だが…。

「なんで2つとも場所同じ!？」

これじゃあ最悪の場合、竜に睨まれながら刀拾ってそいつで切り
かかるしか無いじゃんか！

宝石は「奪取」って書いてあるからどうせもう誰かに拾われちゃ
ってるんだろうなあ…とか分かるし、オリハルコンなんて「探索」
だから！もう面倒ってあっさり分かつちゃうから妖刀とドラゴンに
したってのに。

まあ、まとまってるならまとまってるで楽なだけだな！

「その2つは出身の世界が一緒なので同じところに逃げてるんだと

思いますよ？出身が同じということは、魔力も同じ波長というか同じ感じなので共感を感じ、一緒に飛んで行ったかと」
「なるほど。そういうことですか」

俺が心の中で怒鳴っていたら似非天使が答えてくれた。

さて。

今俺が居るのは例の基地とやらで、クエストに関して質問というか暇つぶしに秘密基地に連れて行ってもらった。

ちなみに日付は5月16日月曜日で、似非天使とのファーストコ
ンタクトからぴったり1週間だ。

遅刻しかけた日から、俺は授業中ペーパーナイフで紙を細かくしたり家で包丁を振りまくったり、朝森と腕相撲したりどつきあったりで、スキル値がそれはもうみるみる上昇し、『刀剣スキル』は70後半、

その他スキルは60位まで行って、あれ？もう完全習得しちゃうんじゃない？とか舐めてたら、今日の朝ステータスの状態異常《取得経験値量増加》が無くなっていて、スキルを上げるのが物凄く面倒になってしまった…。

なんでも、あの状態異常はシステム取得から一週間限定で、取得経験値の量が3倍になっていたらしい（赤いやつかよ）。

ああーあ、他のスキルもあらかた上げておけばよかった…。

「とにかく似非天使さ、俺のこのスキルで何とかなんの？相手は竜だろ？」

「大丈夫ですって。竜は竜でも異世界旅行記内で最低ランクの竜ですから。強い奴はもっと遠くに逃げますから。それに、もう1人の鈴さんに手伝ってもらったらいいじゃないですか。」

そう。あれから似非天使は、捜していた能力者とコンタクトを取っていて、先週の木曜に同業者が増えたらしい。

らしいのだが…。

「まだ一度もコンタクト取った事無いし、何処に居るかも知らん」

残念ながら顔も知らないし、名前も似非天使が言っている下の名前の鈴すずしか分らない。

「えー、鈴さんは良い人ですよ？しかも礫さんと同じ高校の2年生ですよ？それですね、能力は《代弁者》って言って無機物やら植物などの、自分では意識を伝えられない者と会話ができて、仲良くなると操れるらしいですよ？」

「へえ、すごいねー」

なんていう厨二設定……。

「そういえば、礫さんの能力は結局どうでした？」

「え？ああ、そっぴや俺も能力あったんだっけ。えーっと確か《全知全能》って名前で称号にあったよ？使った記憶は全く無いけど」

聞き覚えも無いし使用経験も無い。

「ってか《全知全能》って何！？何でもできるの？何でも知ってるの？人体練成できるの!？」

「まあ、いざとなったらそれを使って竜と戦ったら大丈夫だともいますよ？」

「…そうかねえ？というか、スキルを上げたは良いんだけど、得物が無いってのはやっぱり妖刀を先に探したほうが良いかね？」

俺は懐中時計で時刻を調べてから、読んでいた『異世界旅行記1』を閉じて立ち上がった。

そろそろ帰らないと、明日も学校だから遅刻しちゃうよ全く。

「それもそうだと思いますけど、最悪、包丁とか木刀で立ち向かったり、『薬物スキル』上げてから眠らせたりするのでも良いんですよ?」

ああ、そういう手もあったか。

「いや、でも『薬物スキル』は20位までしか上げて無いから、妖刀優先で丸腰でいいや」

「丸腰ですか?さすがにカッターナイフくらいは持っておかないと、下水道はどぶねずみがいっぱいですよ?」

あー確かどぶねずみって肉食なんだっけ。怖い怖い。

「でもまあ、そういうのは『軽業スキル』で何とかなると思っただけど、無理かねえ……」

自分でも驚いたのだが、『軽業スキル』が50超えた辺りからちよつとしたピエロみたいな動きができるようになったのだ。

まあ、まだ空中三回転とかは無理っぱいが、この間学校でペーパーナイフを素振りしながら歩いていたら、階段で足を滑らせた時に軽く宙返りを決めて着地できた。

ちなみに『軽業スキル』は毎回毎回自転車に乗る前に自転車の上に立ったり、ベランダの柵の上に登って端から端を往復して上げた。はつきり言ってこのスキルを上げるのが一番辛かった。

「まあ、結構な高さ跳べるのなら大丈夫だと思いますけど、下水道は暗いですから間違えて水の中に落ちないように気を付けて下さいよ?」

「ああ、そうか。懐中電灯がいるのか」

危ない危ない。真っ暗闇の中を手探りで進むところだった。

「まあ、現在地は『クエスト』画面で確認すれば分かりますけど、その辺気を付けて下さいね」

「はいはい。そーいえば、似非天使は何をやってんの?」

「え? 私は回収した『物』を再度嚴重に封印しておしてます」

あ、なるほど。

「そか、ま頑張れ!。あ、そろそろ帰してもらって良い? 時間的に」

「あ、はい了解しました」

よし。じゃあ、明日の放課後でも立ち向かってみようかな!。

7・クエスト開始します。（後書き）

『名前：勇橋 礫 《ハヤバシ レキ》』

職業：学生 称号：設定無し

状態：異常無し

スキル

『刀剣スキル』：76 『格闘スキル』：67 『槍・棒スキル』：58

『弓・銃スキル』：62 『ナイフスキル』：69 『軽業スキル』：56

『応急処置スキル』：23 『乗用機操縦スキル』：72 『』

8・下水道は関わらないほうがいいんだよ。

正直、予想外でした。

いやー、うん。もつとあっさり行けるもんだと思ってました。舐めてました。ごめんなさい。

「誠心誠意謝るんで、許してください」

その日、俺は下水道で。

「本当にすいませんでした。通してください」

どぶねずみの目らしき光の群れに土下座していた。

いや、いくらどぶねずみでも、誠心誠意謝れば通してもらえるかなーって。

いや、だって、いまいるのが丁字路の交わってる所の上なんだけどさ、三方位ねずみに囲まれてんだもん。さすがにこの量は予想外だよ。

軽業で跳び越えようにも、明かりが右手に握っている懐中電灯だけなので、下手したら道の真ん中を通っている臭い水の中にドボンだ。

「マジどうしろってんですか！あんた達に食われろってんですか！
」

さすがにこれ以上は冗談が通用しないかなあと思い立ち上がる俺。すると、俺の足は微かに震えていた。

忘れてた。俺、不安症に上がり症で度胸が無いんだっただ。

「キュー、キュー」

「キュー」

「キューキュー」

どぶねずみ達は、じわじわ寄って来ている。

いや、やばいなオイ。

「人肉は不味いよ？戦時中食べたとか食べて無いとか噂だけど、美味いっていう噂は聞かないよ？いくらジョーズでサメが食べてたって言うても、どぶねずみさん達の舌には合わないと思うよ？」

「キューキューキュー」

あ、やべ。後ろの奴らまで動き出した。

交渉は通じないのか？そうなのか？

自分でも分かる。

俺は今かなりてんぱってる。

「畜生、深呼吸、深呼吸……んでもって、何かスキル……何かアイテム……」

俺はようやく少し落ち着いて眼鏡のレンズに画面を展開して、打開策を練る。

「えーっと、アイテムアイテム……ってある訳ねえだろ！おにぎりくらいしかねえよ！」

とかいいつつアイテムからおにぎりを取り出し（眼鏡から取り出し）前後の群れに放る。

これで少し余命が延びた。

ってあれ？左の奴ら、睨んでくるだけだな。

「あ、こいつら泳げないのか？」

それなら助かる可能性が無いことも無い。

とか思ってたらドボンドボン音を立てながら、どぶねずみ達が水に飛び込んできた。

「ああーやべえ、来る来る！来てる来てる！ああ、もう！死ぬより臭くなるほうがマシだ！」

俺は覚悟を決め、左前方に向かって跳ぶ。

「南無三つ！」

無意識に目を瞑って跳ぶ。

そして足が地面を捉えたら、一瞬だけ目を開けて今度は右前方に跳ぶ。

再び足が地面に着地したのを感じ、目を開けて懐中電灯で足元を確かめる。

「よし、安全確認！」

「キューキューキュー！」

後ろからどぶねずみ達の怒り（だと思っ）の鳴き声が！

「のわー！ダッシュダッーシュ！！」

「キューー!!」

俺はもうなりふり構わず、足の赴くままにダッシュする。
右、左、右、左、左、右……。

「キューーキューー!」

左、左、右、左……。

そして気が付けば後ろにねずみの声は無く、暗い下水道に俺のゼーゼー言う声だけが響いた。

「はぁ……はぁ……はぁ……ふう……とりあえず助かったー。」

はぁ。俺生涯16年で終えるのかと思っちゃったよ

「さて。妖刀君、出ておいでー」

とりあえず生命の危機は脱したので、目標を探して歩き出す。
帰るのには、水の流れの逆に走っていけばいいのだが、妖刀とドラゴンがどこにいるのかが分からないから、まだ大分帰れなさそうだ。この辺にいればいいんだけど……。

でもまあ右手に懐中電灯もあるし『アイテム』の中に食料もあるから、若干余裕はある。明日は学校なので時間的には余裕は無いが。

「妖刀ってムラマサみたいなヤツだよな。イメージとしてはこう……
黒い刀から紫色のヤバイオーラが出てる感じなんだけど……。俺触れるかな……」

あ、曲がり角。よしじゃあここは右で。

「ドラゴンはなあ…、名前からして一介の学生が立ち向かうような相手じゃないと思うんだよな」

名前が緑地竜だから、たぶんファンタジー的な『地』属性だろうと考えると、相当硬いんだろうと思う。

ってか硬さが売りだと思っただよ。勘と直感と雰囲気です。
イメージ的には、緑色のトカゲが猛突進してくる感じ。

「もしそうだとしたら、勝ち目無いよな…」

俺が使える得物が刀と素手しかないからなあ…。狙うなら口の中とか眼球とか。

あ、また曲がり角。ここは左で。

「はあ…どこぞのゲームみたいな爆弾が欲しいっての……む？」

いま懐中電灯の灯りに何か反射したぞ？もしかして第一関門突破かな？

もう一度そこを懐中電灯で確認すると、そこには真っ黒い刀のような物が刺さっていた。

「よしよし、刀ゲット」

と、俺が早足で光ったものの所に向かおうとした時。

「…シュー…シュー…シュー…」

なんだか蛇の息のような音がしたと思ったので、刀が刺さっている所に向けていた懐中電灯の灯りを少し上に向けてみる。

「え？いや、ちょっと待とう？な？」

まあ、予想通りというか想像のままの、緑色の甲殻に覆われたトカゲがいた。

「シュー……シュー」

あ、やべ、若干足が震えてきた。
今の内に、ゆっくり逃げておこう……。
ばれてないばれてない。見つかってない見つかって……。

「……シュー……」

あ、やべ。目合った。
ヤツは思いつきり体勢を低くして……。

「………シャアアアア……」

飛び掛ってきた。

8 ・下水道は関わらないほうがいいんだよ。（後書き）

なんか、ぐだぐだな文章になってしまいました……トホホ……。

9 はじめましてです。

とりあえず、震える体を叱咤して跳んでくるトカゲをしゃがんでやり過ごす。

「キシヤアアア!!」

トカゲは奇声を発しながら俺の頭上を跳び越えて行って、地面に激突した。

そりゃもう、大砲が撃ち込まれたみたいに地面に激突した。

「ギヤアアア!!」

あ、顔から血出てる。これ以外と勝てんじゃね？

俺は余裕を感じて、トカゲが地面に突き刺さってる隙に刀に向かって跳ぶ。(いやだって水路の向こう側だし)

ところがどっこい。背後からものすごい気配。

「シャアアア!!」

瞬間的にトカゲが跳び込んで来るのを理解した俺は、直感で跳んでくるトカゲの頭を足で捕らえて……思いっきり蹴る!

イメージとしては『自転車で走りながら、同じく走行中のめっさ早い車を右手で掴み、自分の自転車を加速する』みたいな感じ。

そんな感じに跳んでくるトカゲの勢いで加速した俺は、通りすぎそうになった刀を慌てて左手で掴み、刀もろともそのまま前方へ吹っ飛ぶ。

それでもつて『軽業スキル』で華麗に着地！

「なあーっと！想像以上に速かった…」

大分奥へ吹っ飛んだ俺は、振り向いて懐中電灯を向けて、地面に激突しているトカゲを確認する。

「あの速度に真っ向から突っ込んでつて、刀突き出せば向こうの速度で十分致命傷になると思うんだけどなあ」

右手に握った妖刀の手触りを確かめつつ、覚悟を決める。

…とまあ、格好良く言ってみるも、体が緊張というか恐怖で思うように動かない。

「シャー…」

懐中電灯を左手に持ち替え、右手に刀。

微かに震えつつも、体を横に向けて腰を落とし、刀を突き出すように構える。

大方、フェンシングの構えのようなものだ。

「よし来い…トカゲ…」

あ、そういえばこの刀『妖』って付いてるけど、俺使って平気なのか？

「キシヤアアアア！！」

右手の刀に不安を感じていると、その隙を狙ったようにトカゲが突っ込んで来た。

「ぬおつやべ！」

慌てて体に力を込めて… タイミングを狙って、突く！

「チエストオオオ！！」

体が強張っていたが、その辺『刀剣スキル』のフォローで何とかなり、右手の妖刀がトカゲの眉間に吸い込まれるように——刺さったような手ごたえを感じて、俺は吹っ飛んだ。

でもって不運にも後頭部をぶつけて、意識はフェードアウト…。

「……痛っ！」

わき腹に痛みを感じて跳ね起きる。

「ってここ何処！？」

辺りは真っ暗で何も見えない。

ふと左手に何か握っているのを感じ、手探りでそれを探り当てる。

「えーっと？あ、懐中電灯か。あ、でも光るとこ割れてる」

ああ、思い出してきた。

トカゲに刀突っ込んだんだよな。あ、それであれから吹っ飛んで

…。

「あ、後頭部！」

血とか出てんじゃないね？平気か？

とそこまで来てようやく俺は、頭に違和感があるのを感じた。

恐る恐る触つてみると、布の感触。

「あ、包帯？でも誰が？」

「……私、だけど……」

「なーつとー！」

全く気配を感じなかったところ（とか言ってみるも、もちろん俺に気配を感じる力なんて無い）から声が聞こえてきて、びっくりぎょうてんぎ吃驚仰天驚天動地。

あ、たぶん四字熟語の使い方間違えた。

「えー？ちょ、だ…誰？」

声のした方へ問いかけると、その謎の人物が光を向けてきた。
うわっ眩しい……。

目を慣らすこと数秒、じわじわとその人が見えてきた。

容姿は俺と同じくらいの身長・体型、服装が見覚えのある服……
というか俺と同じ高校の制服。顔は黒髪黒目（つてそりやそくだ）
に女子にしては短い髪形（ショートだっけ？）で、個人的9段階評価で8くらいの美人（というか可愛い系）。

「……どなたですか？」

女子なのにも驚いたが（何でこんな所にいるんだよ）同じ学校の

生徒というのにも驚いた。

「……その制服……同じ」

相手は俺を指差して言う。

ってそうか。俺も制服着てたんだっけ。

「えーっと、柳葉高校普通科1年6組、勇橋礫です…えーっと、先輩？」

「…普通科2年4組、ささみやすす笹宮鈴」

笹宮…鈴、鈴……鈴…ああ！この人が！

「えーっと鈴先輩つてもしかして、えーっと《RPG system》持ってます？」

「！…うん。まあ…あなたがあの精霊さんが言ってたもう一人？」

ああ、やっぱりこの人だったか。
そうかそうか。

「ええ、そうです。助けてくれてありがとうございました。あ、あのトカゲ…じゃなくて眉間に刀が刺さったドラゴン、どうなりました？」

「…ドラゴン？」

「えーっと、俺そいつに吹き飛ばされたはずなんですけど…」

鈴先輩は何のことか分からないと言いたいような表情で、首を傾げている。

あ、若干可愛い…じゃなくて。

「見てませんか？ あのクエストのドラゴンの事なんですけど」

「…一応、私も探しに来てただけど…見てない。…けど、刀？
ならそこに…」

「え？そこ？」

鈴先輩が指差した所を見ると、確かにあの妖刀が転がっていた。
不思議に思い拾って見てみると、あのトカゲのらしき血がびっしり付いていた。

無論、刃こぼれは全く無い。

「あれ？あのトカゲに刺さったはずなんだけど…こいつ自分で抜けて来たのかな？」

俺はとりあえず刀が確保できた安堵で、そんな冗談を口にした。

『さすがは主あまよく分かりましたね』

とまあ、答えが返ってくるとは思わなかった。

「え？は？今鈴先輩しゃべりました？」

「…いや、その刀から聞こえたけど……」

あ、やっぱり？

「えーっと？なんだっけ、あー『パンドラ』だっけ？君がしゃべったの？」

『はい。初めまして。私妖刀わたくしパンドラと申します。』

「…なんでしゃべれるの？」

気になったのか、鈴先輩も刀に尋ねた。

『私は意思を持つ刀、故に妖刀と呼ばれたのであります。ちなみに、先ほど…といっても1時間ほど前ですが、礫さんに拾われた時はまだ力が足りなかったので会話できませんでしたが、例の緑地竜の血を吸って、力が手にはいったので礫さんの元に飛んできた次第でございます。』

なるほど。血を吸う上に意思を持つ刀、妖刀ねえ…。
ところで。

「あの竜はどうした？」

『はい。呻きながら逃げて行きました。』

………意思があつて俺のところ飛んで来れるなら、ついでに倒して来いよ！

10・とりあえず撤退しようか。

「…全く。意思があるなら倒しておいてくれたら楽だったのに…」
『申し訳ありません。我が主』

俺は、トカゲを普通に逃がしたこの妖刀を叱るだけ叱ると、再び鈴先輩に向き直った。

「すみません鈴先輩、ちょっと灯りこつち向けてもらっていいですか？」
「…いいよ」

鈴先輩が灯りをこつちに向けてくれたので、俺は胸ポケットから懐中時計を取り出して、時間を確認する。

ちなみに家を出たのが23時、下水道に潜入したのが24時（この間の1時間は、似非天使と話したりしていた）そして今の時刻が大体3時30分。

「3時半か…。俺が気絶してたのが1時間らしいから…帰るのには2時間半かかる…。下水道の入り口から高校まで大体20分…2時間余裕があるか…。鈴先輩はどうします？」

「……竜の場所は一応分かるけど、私はまだちょっと捕まえられないし、戦うのも得意じゃないから、勇橋君が体調直してから一緒に出直した方がいいと思う……」

あ、そうだった。俺頭怪我してるんだった。
と頭を触ると、今度はわき腹がズキンと痛んだ。

「あれ？わき腹も？」

そついや、わき腹の痛みで目覚めたんだっけ。

思い出しながらわき腹を触ると、制服に若干穴があいていてそこには包帯は無かったが、乾いた血のような感触があった。

鈴先輩はこの傷には気づかなかったのか…。

「ん？てか鈴先輩竜の居場所分かるんですか？」

「…うん。この壁たちが、教えてくれるから…」

ああ、そついやそついう『能力』持ちでしたっけ。

「なるほど。じゃあ、今日はもう帰りますかね」

俺はそう言つて、眼鏡のレンズに画面を展開。『アイテム』画面を開いて

「じゃあパンドラ、ここに入つて」

『なんですと！？』

パンドラをしまった。

「あ、鈴先輩のほうがり道正確に分かります？俺、この水の流れと逆に歩いていけばいいとか考えてたんですけど。」

「…案内する。ついてきて」

「あ、はい。ありがとうございます」

俺は若干痛むわき腹を押さえながら、すたすた歩いていく鈴先輩についていった。

ん？そついえばどうしてわき腹怪我したんだ？

そんなこんなで、現在時刻 8 時ジャスト。

下水道から案外簡単に出てこれたので、下水道の出口で鈴先輩と別れて一度帰宅し、破れた制服を脱いでもう一着の制服に着替えてから、軽めの朝食をとって、登校した。

「で？なんで俺の席に君がいるんだい？朝森君」

「いや、だってまた遅いから？今日こそは休みかなーと」

「んな訳あるか。そこどけ」

なぜか俺の机でだらけていた朝森を鞆で叩いて追い払ってから、俺は机に伏せて寝た。

いや、だって眠いし。昨日寝て無いし。

「なー勇橋ー、その包帯どうしたんだー？」

あ、しまった。包帯つけたまんまだった。

「いや、昨日帰りに転んだだけだから」

「え？大丈夫か？」

「ハハハ、平気平気」

「でも後頭部真っ赤だぜ？」

「え？マジ？」

慌てて手で後頭部を探ると、もう固まってはいるが結構な広範囲

で血が付着していた。

「げ、やばっ」

「気づいてなかったのかよ」

「知らなかった」

とりあえず席を立ち、廊下の水道へ向かおうとしたのだが…

「な！お前、左足真っ赤…いや真っ茶じゃねえかよ！」

「は？左足？」

見ると、わき腹から流れた血が、ズボンの左側を真っ茶に染めていた。

完全に考えてなかった。

「……あーもう面倒だな。いいか」

とりあえず後頭部を洗っておこう。

「ていうかそんなに流血しててよく立つてられるな、お前」

「んー、確かにそうだな。よく生きてるな俺」

『応急処置スキル』が血を補充したのかな？何で傷口にかさぶたができないんだろうと思ってたけど、血液の補充をしたからか。

『応急処置スキル』セットしといて良かったー。

とか考えながら後頭部を水でじゃばじゃば洗う。

「うおっ、勇橋の血で流しが真っ赤に！」

「おっと、それはすまない。責任は朝森命にツケといてくれ」

「責任をツケるってなんだよ」

後頭部を洗ってから（数人の同級生に変な目で見られた…）再び包帯を巻いておいた。

「左足は…いいかな。面倒だし」

「いやいや、意外と鉄臭いんだよ。血液って鉄分ばつからさー」

「お前…血液にFeが含まれている事を知ってるのか。予想以上だ」
「酷いなー勇橋君」

「え？だって、あの有名な朝森のことだから、てっきり理科の知識なんて『昆虫は足が6本』ってくらいしか知らないもんかと…」

「あの有名な朝森って、どの朝森だ！ってかどんだけ無知だと思われてたんだよ！」

「でも実際そんなもんだろ？」

「ちやうわ！」

「…あのー、勇橋君？ちよつといい？」

左足の処理を諦め、朝森と軽く漫才をしながら席へ戻ろうとしたが、名前も知らない女子に呼び止められた。

「ん？いいけど？何か用？」

全く見覚えがない女子なんだが……あ、鉄臭いって苦情かなんか言いに来たのかな。

「えーっと、笹宮先輩が呼んでましたよ？あっちの階段の所で」

「え？あ、そう。ありがとう」

それだけ俺に伝えると、女子は自分の席に座った。

にしても、なんか用事かねえ…『RPG System』の『フレンド』画面で連絡取れるのに。

「え？いやいや、勇橋君。笹宮先輩ってあの笹宮先輩？」
「あのってなんだよ、あのって」

なんだか妙に食いついてくるな。

「いやいや、あの笹宮先輩を知らないと！？あの『沈黙の姫』と呼ばれる笹宮先輩を！？」

いや、キモイから。

なんだよ『沈黙の姫』って意味分からんよ。

「なにその二つ名、厨二病めいてて気持ち悪いんだけど」

「そう言うなって！我が友よ！実は俺も思ってたんだけど、FCの会長がそう言えって強要してくるからクラブNO・122の俺は逆らえないんだよ！」

「意味分からんから。てかFCって何？サッカーでも始めるのか？」

朝森

「ちげーよ！ファンクラブだよ！ファンクラブ！笹宮鈴ファンクラブ！」

「キモイ。却下。じゃあ俺呼ばれてるみたいだから。また後で」

「NO！！我が友よ！！！」

ファンクラブまであるのか…。さすがラノベの舞台の聖地、私立校。何でもアリだな。

で、えーっと…あ、いた。

「鈴先輩、どうしたんです？呼び出したりして」

階段の所に突っ立っていた鈴先輩に話しかけると、何だか一瞬周

りの男子に睨まれた気がした。

オイオイ、ファンクラブ規模でかいな。

「……左足が痛いことになってるの、気づいてなかったみたいだから……」

そう言って鈴先輩は、紙袋を渡してきた。
中身はどうやら制服のズボンらしかった。

「?どうやって手に入れたんです?」

「私の兄の」

先輩すごいですね。

「ははは、ありがとうございます」

「どういたしまして」

「はあ……じゃあ後の事はこっちから連絡しますね」

そう言って、俺は眼鏡のレンズを三回叩いた。

「……分かった。じゃ」

「はいはい。さいならー」

はあ、先輩いい人だな……。

10・とりあえず撤退しようか。(後書き)

どうやら僕は、意味の無い日常を書くのが好きみたいですな。

11・あれ？俺無双ですか？

いやー、ファンクラブとか、ある意味最強だよな。あの勢いとキモさ。

「なーなー勇橋ー、どうしてお前いつも寝てるのに笹宮先輩と仲いいんだよー」

「仲いいとかいうレベルじゃないだろ。まだ知り合いレベルだつての」

「そーゆーなつて。おれらファンクラブはさ、暗黙のルール『抜け駆けはするな』で話すのもタブーなんだぜ？」

「……そういう所は控えめだよな、ファンクラブって」

んな馬鹿らしい会話はいいんだよ。とにかく今は睡眠睡眠。

「なーなー、勇橋が俺に教えてくれなかったら、事実を面白おかしく捏造して、おはようからおやすみまでファンクラブにストーリーキングされるようにしちまうぞー」

「……おい、そりやないだろ。ていうかもう若干ストーリーキングされそうなんだが」

実際、先ほどから挙動不審というか目つきが怪しいというか恐ろしい男子が、結構周りにいたりする。

「教えるよー」

寝ようとする俺に絡んでくる朝森にツッコミを入れながら、どう誤魔化そうか脳をフル回転させる。

無論、事実なんて言う気も無い。

「えーっと、あれ、単純に昨日自転車で転んだ時に笹宮先輩が通がかかったんで、ちよっと手当てしてもらったというか？されたというか…」

「本当か？」

「無論。俺は嘘はつかないのが特徴だから。もし俺が嘘ついたらそれは俺の偽者だから。よろしく」

「なるほど。じゃあ、その言葉自体嘘だからお前は偽者だな！」

「だとしたら嘘付いたら俺は偽者っていう言葉も嘘だから、俺は本物な？」

「……え？あ、そうか…」

「はっはっは、精進したまえよ朝森」

「……朝から元気だな勇橋」

「え？俺、超寝たいんだけど」

俺、あの下水道でトカゲぶっ飛ばしたら、朝森と芸人目指すんだ…。

徹夜明けのテンションで、そんな死亡フラグ(?)を考えてしまった。

そして時刻は21時。

俺は今、似非天使の所に来ていた。

…いや、連れてこられた。

「あ、礫さん。目覚めました？」

「……首筋が痛むけど、目覚めたよ……」

なんか知らんが、家で色々とスキルを地道に上げていたら、唐突に似非天使がやってきてきて首筋に……

「で、何の用？あ、妖刀返す？」

俺はそう言っただけ眼鏡のレンズを叩き、『アイテム』画面を開いた。妖刀のアイコンはただの刀の形をしていた。

「いえいえ、改めて考えてみると、本に封印しなおすより、そのアイテム画面に入れておくほうが断然安全ですから。そこに入れといてください。で、墓の下まで持つていって下さい」

「……ん。一応了解」

「で、今日ここにお連れしたのは、なんでも礫さんが昨日緑地竜にぶつ飛ばされたと聞いたので、軽く自分の性能を知っておいたほうがいいんじゃないかと思ひまして……」

なる。

「という訳で、あの妖刀出して下さい。あ、スキルはちゃんと戦闘用にしてくださいよ？」

あ、ああ。そっか、危ない危ない。危うく補助スキルとか生活スキルだけで戦う所だった。

俺は眼鏡のレンズに展開されている画面でスキルを戦闘用に組みなおす。

「よしOK。で、何やんの？」

「あ、はい。ちょっと中堅級モンスターの的なのと連戦トレーニングです」

「…中堅級って、あれ？あの『ボスって言うにはちょっと弱いんだけど、雑魚にしては半端なく強い』みたいな中途半端なヤツ？」

ドラ。エのスラ。ムタワーとかモン。ンのゲ。ヨスみたいな。

「そんな感じです」

似非天使はそう言って、周囲にあつたもの（異世界旅行記やらペンやら俺の鞆やら）を全てド。えもんのポケットの如くしまつていく。

「じゃあ、礫さんは魔法使えないんで、ゴーレム2体と…」

え？ちよつと待って？俺の得物斬撃タイプなんだけど。堅いの苦手なんだけど

「オーク4体、ケンタウロス4体で」

似非天使がそう言うと、似非天使の周りに紫色の魔方陣が、ひい、ふう、みい…10個。

「大丈夫なはずです。礫さんは刀剣スキルが70あるんですから。それって、異世界行けば魔王を吹っ飛ばせるレベルですよ？大丈夫ですよきつと」

という少し不安な台詞を残して、似非天使は消えた。

残されたのは、刀一本握った、本来インテリ派の高校生と石の巨人と豚人間と馬人間

「弱いものイジメだろ？これ。戦隊ヒーロー並に数に違いがあるんだけど」

とりあえず軽口を叩いて、震えそうになる体をほぐす。

「…ふう……」

じゃあ、日本人の侍（気取り）らしく、刀を左腰に構えて抜刀のポーズ。

「…よしこい！まずはオークでお願いしますっ！」

俺の言葉が届いたのか届いてないのか、オークとケンタウロスが群れになって俺に襲い掛かってきた。

「ちょっと待とうぜオイ……」

オークの得物は木に石をくりつけたような棍棒？ケンタウロスは槍だ。

つまり、ケンタウロスから片付けたほうがいい…と思う。

「よしOK。とりあえず『軽業スキル』舐めんなよ」

俺は格好つけのポーズを解いて、オークに向かって走る。オークも獲物が動いたのを見、雄叫びを上げて走ってくる。

「はっはっは、甘い甘い。まだ戦闘歴2日目の俺に言えたことでもないがな！」

そしてオークと俺が衝突しそうになった時に、俺は脚に力を込めて、オークを跳び越えて1回転。ケンタウロスズ（複数形）と向き合う。

『軽業スキル』も大分鍛えているので、オークは結構後ろ。気にする事は無い。

とりあえず俺は心の中でこれからの殺生を天に謝罪してから、右手に握っていた刀を、目の前のケンタウロスに無造作に振るう。

だがまあ、ケンタウロスは戦闘歴2日目の俺と違って一応は戦闘のために生まれた存在。

そんな斬撃軽く避ける——とか思っていたのだが、自分の右手は、ケンタウロスの動体視力を上回りごく普通にケンタウロスの首を一閃…。

「え？嘘お…」

残りのケンタウロスズも一瞬動きを止めた。

え？嘘だろオイ。何、俺無双？

だがそこら辺は戦闘のプロ。

光の粒になって消えていく（召喚モンスターだからか？）仲間を尻目に、ほんの一瞬で我に返ったケンタウロスズが一斉に槍を突き出してくる。

「おわつと！」

でもって俺はそれを刀で斬り払い、思い切りケンタウロスズの真ん中へ踏み込んでまたまた横一閃。ついでに右側のケンタも斬り捨て、返す刃で左のケンタも一閃。

「とりあえずケンタウロスズのご冥福を…」
「わぎゃあー」

俺が光の粒になって消えていくケンタウロスズに合掌していると、
ようやくおいついたオークズ（複数形）が襲い掛かってきた。

「行けっパンドラっ！」
『なんとっ！』

俺はその飛び掛ってきた礼儀知らずのオークに刀を投擲して返り
討ち。残る三体の内、右側の奴を狙って踏み込む。

「そっぴや、俺って『格闘スキル』も上げてたんだよな…」

直感で俺を察知したのか、高速で目の前に現れた俺に右手の棍棒
を振りかぶるが——無論、遅い。

俺はその右手を左手で掴み、左足をそいつの横に踏み込ませて右
足で右方向に払うように足払い。でもって仰向けに転ぶそいつの腹
を、全力で叩き落とす。

「チエストおおおお！！！」

ドゴオオオオン！！とちよつとした爆発級の音を出して、俺の右
手は軽いクレーターを作り出した。

もちろん、豚人間ことオークは木っ端微塵。俺の左手に握られて
いるオークだったモノを含めて、光の粒になって消える。

そして、俺の右手が繰り出した衝撃波で吹っ飛んだオークズも消
える。

「あ、あれ？そんなに強かったかな…？」

はつきり言つて自分が一番驚いた…つと、まだいたんだっけ。
クレーターの前で佇む俺の視線の先には、未だに出てきた時のポ
ーズのまま動かないゴーレム兄弟がいた。

「さてと。こいつも素手でいけるかな？」

ちなみに刀は、オークに投げたまま帰ってこない…というか、帰
ってこようとしたときに衝撃波で吹っ飛んだ。

「よし来い！ゴーレム兄弟！」

「ボオオオオ…」

俺が呼びかけると、ようやく動き出した。

つまり、俺が呼びかけるまで待つてくれた訳か

「なるほど。一応そこは親切設計なんだな」

あ、そういえば、今回は俺震えて無いな。
自分の実力知ったからか？

「まあいいや」

ゴーレムは、2体が左右対称になって同じ動きで俺に向かってき
た。

俺はそれを睨んで、足に力を込める。

「「ボオオオオオ！！」」

ゴーレム兄弟は2体揃って拳を振り上げると、俺めがけて振り下

ろす。

そして俺はそれを、全力で回避——しすぎた。

先ほど俺が叩き出した轟音よりも、少し大きめの轟音を響かせて、ゴーレム兄弟の拳はクレーターを作り出したが、無論そこに俺はおらず、そこから50m程後方にいた。

ちよつと迫ってくる拳に恐怖を感じて、逃げる時に足に込める力を強めすぎた。

「ふう、逃げすぎた逃げすぎた……。よし！じゃあ行くかね！」

再び足に力を込めてダッシュ。

左ゴーレムの拳の目の前でブレーキをかけてその拳に飛び乗り、その腕を伝って頭部めがけてダッシュ。

「よしOK！」

慌てて左ゴーレムは体を揺らして、俺を振り落とそうとするも、すでに俺はゴーレムの頭部に到達。でもって、全力の回し蹴り！

バゴオオオオン！！と気持ちのいい音を立てて吹っ飛んでいくゴーレムの頭部は、そのまま右ゴーレムの頭部を巻き込んで地面に激突。

光の粒になっていく足場を跳び、横転しているゴーレムに『軽業スキル』の空中1回転を交えてからの踵落としを炸裂させる。

ドゴオオオオン！！とオークの時と同規模のクレーターを作って、ゴーレムが地面にめり込んで消えていった。

「ふう……」

とまあ、俺は汗をふき取る動作を取ってから、眼鏡を中指で押し上げた。

「何？俺こんなに強かったのに、トカゲに吹き飛ばされたの？」

11・あれ？俺無双ですか？（後書き）

ようやくの戦闘描写で、ようやく主人公最強。

というか、話を重ねるごとに主人公の口調が変わっていった…いや
いや気のせい。

今日は後1話更新予定。

12・爆死は壮絶だよ。

「という訳で、礫さん。ご自分の実力。分かりました？」

クレーターの前で、あのトカゲへの殺意を実らせていると、ふつと湧いて出たように似非天使が現れた。

「ああ、ばつちり分かった。でもこんな実力、学校で朝森とどつき合いしてる時とか発揮して無いぜ？」

というかしたら怖い。

「それはそうですよ。礫さん本人が戦闘と認識しなければ、戦闘スキルの力は発揮されないように設定してありますから」

「そりゃよかった…」

しかし、あの時俺は戦闘だと認識していたのに吹っ飛ばされた。つまりそれは、俺が回避すれば避けられたし、刀を刺突に使わないで、連れ違いざまに斬っていれば平気だったという訳だ。

「畜生…あのトカゲ野郎め……」

「トカゲ？ああ、あの緑地竜のことですか？」

「そうだけど」

あ、今何時？

胸ポケットから時計を出して確認… 21時20分。

「ああー、まだ時間あるねえ…」

「時間？誰かと約束でもあるんですか？珍しい」

「あつて1週間程度の奴が知ったような口を利くなよ！図星なんだから傷つくだろ！」

「あ、図星なんですか。で？誰とです？」

「誰って、あんた保護者かよ…まあ鈴先輩とあのトカゲぶっ飛ばしに行くだけだよ」

今日の授業中、暇なんでノートに画面を展開させて『フレンド』

画面ですつと会話^{チャット}していた。その中で色々知ったのだが、鈴先輩の能力（厨二っぽいがもう気にしない！）の『代弁者』は例えるなら、コンクリの壁や木材の机、その辺の草花や地面の砂粒達と会話ができ、仲良くなれば形状を操れたりするらしい。

ちなみに、犬や猫などは鳴いたり吠えたりで意思を伝えられるので会話できないらしい。

…それって境界線微妙だよな……。

あ、さっきの戦いの時に『全知全能』使えばよかったなあ…

「え？鈴さんと会ったんですか！それは良かったです！鈴さん、戦闘スキルはあまり上げる気は無いって仰ってたんで、礫さんといいいコンビになるかと…」

「ああ、そういえば戦闘スキルを上げるのは普通すぎて面白く無いって言うってたな」

俺もその辺共感できるので、今『薬学スキル』や『幻術スキル』『畏スキル』などを鍛えている。

「そうですそうです。まあ、あと残ってるのは緑地竜の抹殺と紅宝玉の奪還ですから。頑張ってください」

「ん？オリハルコンは？」

「鈴さんがあつまり見つけてきてくれました」

ああ、能力的に探すの得意そうだなあ……

「そか。じゃあ今度はゴブリンかなんか100体くらい出してよ。

あ、あとここも真つ暗にできる？」

「はい。できますよ？」

とりあえず時間的に余裕がありそうなので、暇つぶしもかねて暗闇での戦闘練習を始めた。

ついでに『暗視スキル』も上げておこう……。

はい。時刻は24時。場所は柳葉市下水道。

潜入してから1時間経ってるんだけど、まだまだ遠くにいらしい。（鈴先輩談）

「あとどれ位かかりそうですか？」

「……今ようやく半分くらい」

「了解です」

いやー、助っ人がいて良かった。

楽ちゃん楽ちゃん

「……そういえば、精霊さんが腕試しやるって言ってたけど、どうだった？」

「ああ、ゴーレム2体とケンタウロス4体オーク4体ゴブリン20

0体を、倒せましたよ。意外とこの《RPG System》チート級に強いです」

「…ふーん、1番上げてるのってどれ位？」

「『刀剣スキル』で、79ですかね」

「もうすぐ80なんだ…私は『索敵スキル』と『解析スキル』が揃って70…」

さて。時間が余っているので、ここで皆さんにスキル解説！

まず、『索敵スキル』

このスキルは、その名のイメージ通り、敵を探知してその数・場所が分かるスキルで、分かりやすく言うと潜水艦のソナーみたいな物で、レベルを上げ方はたぶん気配を察知したり、隠れてる奴を探したりしたらいいと思う。つまりかくれんぼが最適だ。

でもって『解析スキル』

これはその物（草花や動物・人間等）を見て、その物の名称や特徴が分かるスキル。レベルの上げ方はちよつと特殊で、実際に見てその物の特徴や名称を性格に思い出さないといけない。

ただしレベルが40くらいになると、名称は勝手に思い出せて知らないものでも分かるようになる。

とまあ、レベルを上げるのが面倒なスキルばかりだ。

この二つのスキルは『戦闘スキル群』の『補助スキル系』に所属する。

「…そういえば、礫君ってスキル補正で身体能力高いよね？」

「ん？あ、はい。結構高いですけど」

全力でクレーターが作れます。

「…それなら、道教えるから、走って行ったほうが早くない？」

「…確かにそうですね、鈴先輩は？」

「…礫君に連れて行ってもらおう」

「……」

これは？背負うのか？そ、それともお姫様抱っこのアレか？フラグか！？

「…とりあえず、背負ってもらって…」

ですよ…。高速で走るのにお姫様抱っことか、風圧半端無いですもんね。

「…了解です」

俺は手持ちの懐中電灯を、常時レンズに展開中の画面へ投入。そして鈴先輩をおんぶする。

あ、これはこれでいいかも（笑）

あーいやいや違う違う。決してムフフな下心とかじゃなくて！大体鈴先輩は女性のアレ小さいし…って何考えてんだ俺！？

「じゃあ、とりあえず真っ直ぐ」

「…は、はい了解です」

無心無心平常心平常心。

で、足に力を込めて、高速ダッシュ。

「あ、そこ右」

「おーっと、はいここですね」

「うん。あ、つぎ左」

「了解です」

「そこ右」

「はい」

序盤と違い、曲がる回数が多くなってきた。
トカゲが近いのだろうか。

「そこ右、で次は左」

「右…左…あ、いた」

俺の高速ダッシュで約5分。
ターゲットロックオン。

「じゃあ、とりあえず先輩はここにいてもらっていいですか？」

「…ん。分かった」

水路の脇で先輩を降ろして、水を飲んでいる（オイオイそれ下水だぞ？）トカゲを一睨み。

「とつとと終わらせて、今日こそ寝てやる」

今回は自分の実力も分かったし、懐中電灯も鈴先輩がもってるから余裕余裕。

俺は口笛でも吹きそうな勢いで姿勢を正す。

「とりあえず、これからの殺生をお許し下さいな…」

あ、別にこれ宗教とかじゃ無いから。

なんとなく行っておかないと気が治まらないというか…

「シャアア……？」

あ、見つかった。よし。行くか。

即座に両足に力を込めながら右手にも力を込める。
何たって依頼は『ドラゴンの消去』だからね。

「シャアア！！」

トカゲが吠えるとはほぼ同時に俺はトカゲに向かって跳ぶ。
実際にはほんの一瞬だが、徐々にトカゲの口が近づいているのが
理解できる。

「木っ端微塵ーっ！！」

俺とトカゲが激突しそうになったときに、右手を思い切り、炸裂
させる。

ドゴオオオオオオオン！！

と、物凄い音をたてて、トカゲもといドラゴン（緑地竜）はまさ
しく木っ端微塵の肉片に成り果てて、下水道を流れていった…。

とまあ、下水道という閉鎖的空間内での大爆発^{トカゲ}なので、音が物凄
い事になって襲ってくる。下手したら鼓膜破れるんじゃない？

しかし、その辺しつかりと考えて、『異音耐性』というスキルを
つけていたので被害は少ない。

「とりあえず、あの肉片に成り果てたトカゲ…もとい緑地竜よ…安
らかに…」

だって、壮大な爆死だぜ？死後くらい安らかに眠れよ…

「じゃあ、帰りますか。鈴先輩」

「その前に、礫君血と肉片、下水に流して行つて」

あ、俺真っ赤っかだ。

12・爆死は壮絶だよ。(後書き)

今日はここまで。続きはwebで…じゃなくて明日。

ああ…PVとかはどんどん増えるのに、ポイントが増えない…

やっぱ俺文才無いんですかね…

13・作戦会議です。(前書き)

地球編ラストエピソードになる予定。

13・作戦会議です。

「あ、おはよう。今日は寝てるんだな」

「……」

「寝てるとこ悪いんだけど、何でも君のストーキング部隊がどうしても君を見失うっていう報告をしてるらしいんだけど？勇橋ってなんか某国のスパイとか？そういうオチ？」

「……んな訳あるかってーの」

「えー、じゃあ何で見失うのさ。あいつらのストーキングは凄いだぜ？任務のためなら、蚊さえも見失う事は無い精鋭部隊なんだぜ？」

「どんな任務だよ」

「それはさておき、勇橋、ストーキングをまいて何処へ逃げてるって言うのさ」

「はっはっは。私は神出鬼没のまさしく幻。見つけることなどできんさ。はっはっは」

「おっはようございまーっす！あなたが勇橋君ですかー？」

「「誰！？」」

俺と朝森が早朝漫才を繰り広げ、「あ、今日はちよつとネタのキレが悪いな」とか思っていると、何やら活発そうなポニーテールの美人さんがメモを片手に話しかけてきた……っていつからここに……？

「はい！私、2年3組新聞部の日野美月ヒノミツキっていいいます！」

「は、はあ……。で、そんな先輩がこんな睡眠少年にどんな御用で？」

朝森は何だが日野先輩を見てぼーっとしている。

一目惚れか？くっくくく、後でからかってやろっ。

「えと、勇橋君があの鈴と仲良くなったと聞いて、鈴の友達として話が聞きたいなーって思ったのとジャーナリズム魂が燃えたから取材に来ました！」

「…？はあ……」

あれ？鈴先輩絡み？だから朝森は放心状態なのか？この人も有名な人なのか？

「で、とりあえず勇橋君、鈴との馴れ初めを…」

「却下。寝ます」

ジャーナリストにまともな奴はいない。って聞いたことがあるな。

（偏見）

「えーちよつと！あ、君は確かFCの会長の弟君だよね？てことは勇橋君のストーキング部隊からの報告聞いた？」

「……！！は、はい知ってますよ？」

声が裏返ってるぜ？朝森君。

「じゃあじゃあとりあえず部室へどうぞ！」

「あ、はい！」

机に伏せている俺の耳に、遠ざかっていく2人の足音が聞こえたので、俺は素直に寝る事にした。

…にしてもあの先輩、いつ現れたんだろうか？

そんな訳で放課後。色々やって再びストーキング部隊をまいて、
似非天使に頼んで基地へ。

『受注クエスト

《宝玉の奪取》 クリア条件・紅宝玉の回収。

クリア報酬：回収した宝玉

宝玉の所在地：柳葉市日田南201-3839『浅見』宅』

「えー…完全に人の家じゃないですか……」

「しかも結構有名な、あの浅見さんの家だし……」

「え？浅見さんの家って有名なんですか？」

「無駄に富豪で、物凄く太ってて性格も悪いし態度も悪いおばさん」

「富豪？こんな半分田舎みたいなところにですか？」

「田舎だから土地も安くて、家が学校の体育館くらいある」

「んな面倒な……」

「更に常備警備員＋防犯装置（最新鋭）作動中」

「家ごとぶっ飛ばしましょう」

軽く本気で考えた。

でもこの能力、対科学向きじゃ無い気がするんだよねあ…

『ハッキングスキル』とか無いし。

「…家はぶっ飛ばさないけど、軽く形変える」

「ああ、家とコミュニケーション？」

「10分くらいないと、仲良くなれないのが難点……」

「じゃあ、俺が突っ込んで警備員叩きのめしましょうか？」

「……」

うーん…でもさすがにそんな事をやろうとするとなあ……。やるのが犯罪めいてて怖気付いちゃうな…。

「やっぱり無しで」

「…あそこは庭にも警報装置があるから、家と話せない……」

「うーん…警報装置に『幻術スキル』って効きませんかね？」

「…ん？」

「最近鍛えてて『幻術スキル』のレベルが50いったんですけど、そのおかげで、分身みたいな出せたり自分の姿を消せたりするんですけど…機械に通用しますかね？」

「…それだったら『隠密スキル』上げて潜入するほうが可能性があると思う…けど」

「うーむ……」

何か無いかなあ…俺『隠密スキル』は37なんだよね…。

「という訳で、似非天使は何か策無いですか？」

「え？私ですか？そうですねー…前にイタリアで似たようなことがあったときは、魔法で姿を消して、わんさかいた警備員を眠らせて取りましたけどね」

「そんな物でなんとかなるんですか…」

でも魔法使えないから、そこは『幻術スキル』で代用して…。

「やっぱり正面突破でいいんじゃないですか？」

「それは少しまずいと思いますけど…」

付け焼刃な小技に走るより、自分の実力を最大限に生かせる戦い

のほうがいいに決まってるだろ？

「じゃあ、こうしよう。一応は潜入する。でもって、見つからなければそれでよし。見つければ俺が全力で攪乱・破壊で、鈴先輩がコミュニケーション」

「…というか精霊さんが手伝ってくればそれでいいのでは？」

「え？私、行つたほうがいいですか？」

「…俺ら2人じゃ、まだ魔法も知らないから科学には勝てない」

「…じゃあ、精霊さんも手伝うつていう方針で、作戦会議」

「OK。じゃあ、まず似非天使がまず、宝玉を取ってきて…」

「それができたらやってます。」

はははジョークジョーク…。

「無し無し、今の無し。えーっと…って、ん？できないの？イタリアでできたって言ったのに」

「イタリアは軽い博物館のようなところでしたし、警備システムもしよばかったですから」

という事は、似非天使でも最新鋭の科学には勝てないのか？

「魔法っていうのは万能じゃないんですよ。いくら姿を消すって言っても『姿が見えなくなる』だけで『透明になる』訳じゃないんです。つまり蝙蝠こうもりの音波には見つかってしまつし、熱源センサーにも見つかってしまいます」

なーる。

科学ってのは毎日進歩してるもんねー。

「…じゃあ、まず精霊さんが礫君に不可視の魔法をかけて、それで

礫君が『幻術スキル』を展開して潜入。これで大丈夫じゃない？」

「それもそうですね。俺は顔を見られなければ後は大丈夫なんですから」

「ああ、そうか。礫さんは顔を見られなければ何とかなるんですか。」

「……一応は学生だから。警察沙汰にならないければ」

「じゃ、それでOKってことで。」

「……私は留守番」

「面倒なんでさっさと行っちゃいましょう」

いざ行かん。浅見宅へ！

13・作戦会議です。（後書き）

あと2話ほどで地球編閉幕。その後は遂に異世界へ！

感想・批判・誤字脱語があれば遠慮せずどうぞ！

読者様の声が聞きたいです！よろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0356ba/>

現実的なRPG。

2012年1月4日14時25分発行